

氏名	林 眞帆	
学位の種類	博士 (学術)	
学位記番号	第 6289 号	
授与報告番号	甲第 3574 号	
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 22 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者	
学位論文名	高次脳機能障害のある人を中心に据えたソーシャルワーク実践のあり方に関する研究 —本人の力を活用した援助の検討— (Study on the Person-Centered Practice in Social Work for the People with High-Order Brain Functional Disorder : Considerations for Support by Maximizing Competence in the Person)	
論文審査委員	主査 教授 岩間 伸之	副査 教授 所 道彦
	副査 教授 岡田 進一	

論文内容の要旨

本論文は、序章と終章のほか、第 1 章から第 5 章で構成されている。序章では、本研究の背景を概観したうえで、研究目的と研究課題、研究プロセスの全体像を述べている。第 1 章では、まず高次脳機能障害の概要と高次脳機能障害者への支援に関する研究動向について概観している。そのうえで、高次脳機能障害者を対象とするソーシャルワーク研究と具体的な援助理論の構築の必要性について論じた。第 2 章では、高次脳機能障害者の語りから生活のしづらさとその構造について考察した。その結果、障害特性による経験から自己のなかで生じる困難さ、偏見や不適切な応答による他者からうける困難さ、ニーズと社会資源のミスマッチによる社会から受ける困難さが確認された。それを基にして、存在の揺れ、本人の対処能力の向上、社会の理解などにワーカーが働きかけることの必要性について論考した。第 3 章では、ライフストーリーから困難な状況への本人の取り組みを明らかにし、障害受容との関連から考察した。本人は、障害を受容も拒否もしないまま、今この時を生きるために〈受容なきままの覚悟〉をもって生きる存在であることが確認された。加えて、本人には自己や環境を変えていく力と、環境や社会システムに関わり影響を与える力があることが認められた。このことから、本人の力を活用した援助の可能性を示した。第 4 章では、ワーカーの実践事例に焦点をあて、そこから「絶えず本人の声を聴く」「現実への直視を支える」「本人の訴えを肯定し添い続ける」「本人をチームで支える」「本人を支える社会環境を創る」の 5 つのアプローチを導き出した。この結果を基にして、高次脳機能障害者への援助の特質について検討した。第 5 章では、本研究で得られた成果として、研究の意義と独自性、本人の力を活用した援助のあり方について言及した。なかでも、本人の力を活用するために必要なアドボカシー機能の重要性についても論及している。終章では、今後の研究の展望として、高次脳機能障害者支援に携わる専門職養成とそれに関連した研修プログラムの開発、研修システムの構築について論じている。また、社会制度の改善や社会資源の開発に向けた社会啓発活動の必要性について言及した。

申請論文では、これまで十分に明らかにされてこなかった高次脳機能障害者の生活のしづらさとその構造および本人による取り組みを解明し、先駆的事例におけるソーシャルワーカーの援助を分析することをとおして、高次脳機能障害者の地域生活支援を推進するアプローチを明らかにしている。さらに、本研究では、現実的な課題に取り組む本人がもつ力に着目し、その本人の力を活用した援助のあり方について考察を深めている。研究対象である高次脳機能障害者は、表出される症状が多様で、また、わかりづらいという特徴をもつため、社会福祉実践のなかでは対応が難しい範疇に入る人として位置づけられてきた。2001 年に始まった厚生労働省の「高次脳機能障害者支援モデル事業」によって、診断基準や訓練、生活プログラムが開発されたものの、高次脳機能障害者の暮らしを総合的かつ包括的に支える援助方法は、いまだ確立されていない。したがって、本研究では、生活主体である本人の語りから具体的な生活課題を明確化し、ソーシャルワーカーの実践事例の分析によって本人による課題解決の過程を支える援助理論を示した。なかでも、本人主体の援助を推進するうえで重要となる高次脳機能障害者の特質について、障害受容との関連から明らかにした点に特徴がある。

論文審査の結果の要旨

本研究の意義としては、高次脳機能障害者への援助のあり方を明らかにすることによって、効果的な援助を進めるためのアセスメントや介入、評価のために必要な視点と知識を提供できること、さらに障害者援助に向けた新たな視点を提供できることが指摘できる。本論文は、高次脳機能障害者の生活課題とその課題に取り組む本人の力を明確にしたこと、さらに本人の取り組みの過程においては、従前から指摘されてきたいわゆる障害受容という文脈とは関係なく、そこに本人の生きる覚悟を見出すことができた点が学術的成果として指摘できる。このことは、障害者領域におけるソーシャルワーク理論、さらには本人の力を活用したソーシャルワーク理論が構築できる可能性を提示することになった。これらの点で本論文は高く評価できる。慎重に審査を行った結果、本審査委員会は申請論文が博士 (学術) の授与に値するものと認めた。